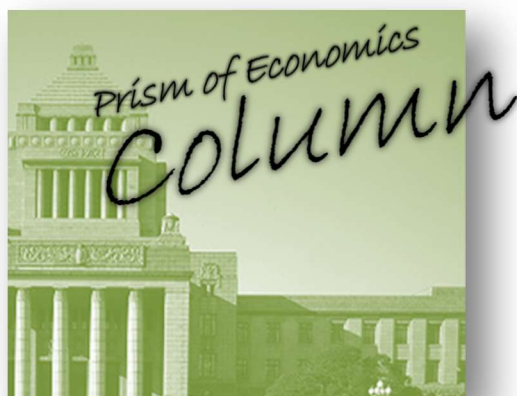


参議院常任委員会調査室・特別調査室

論題【コラム】	近年におけるエンゲル係数の上昇について
著者 / 所属	前田 泰伸 / 調査情報担当室
雑誌名 / ISSN	経済のプリズム / 1882-062X
編集・発行	参議院事務局 企画調整室（調査情報担当室）
通号	254 号
刊行日	2026-7-16
頁	41-42
URL	https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/keizai_prism/backnumber/r08pdf/202625403.pdf

※ 本文中の意見にわたる部分は、執筆者個人の見解です。

※ 本稿を転載する場合には、事前に参議院事務局企画調整室までご連絡ください（TEL 03-3581-3111（内線 75044）／ 03-5521-7683（直通））。



近年におけるエンゲル係数の 上昇について

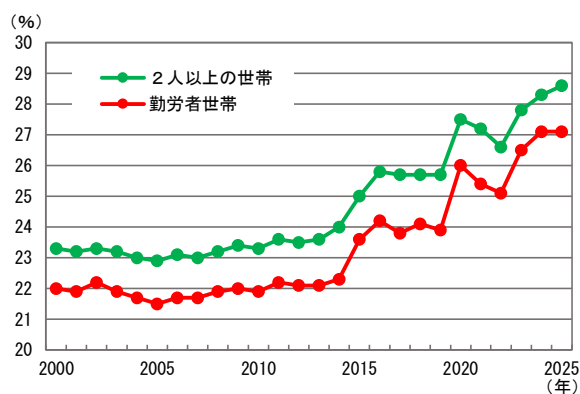
エンゲル係数とは、家計の消費支出に占める食料費の割合（％）のことである。人が生きていく上で食料は必要不可欠であり、一般的には、収入の低い世帯では食料費の割合が大きく、そのためエンゲル係数が高くなる傾向があることが知られている。つまり、エンゲル係数は、その数値が高い（低い）ほど生活に余裕がない（ある）という意味で、生活の豊かさを示す指標と考えることができる。我が国では、特にこの数年は食料品価格が大きく上昇しているが、本コラムでは、エンゲル係数について、食料品価格の上昇や生活の豊かさとの関係に着目しながら見ていくこととしたい。

（エンゲル係数と消費者物価指数の推移）

図表1は、総務省「家計調査」から、我が国における2000年以降のエンゲル係数の推移を示したものである。エンゲル係数は2010年代半ばから上昇傾向にあり、2025年には、2人以上の世帯では28.6％、2人以上の勤労者世帯では27.1％となっている。

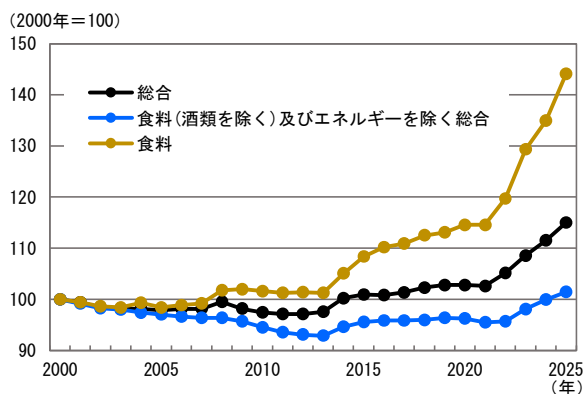
そして、図表2は、総務省「消費者物価指数」から、「総合」、「食料（酒類を除く）及びエネルギーを除く総合」、「食料」について、便宜的に2000年が100となるように比例計算を行い、その推移を示したものである。これを見ると、「食料」の指数は、2010年代半ば以降上昇傾向にあり、2022年からその上昇幅は更に大きくなっていることが分かる。また、日本銀行「生活意識に関するアンケート調査」（2026年3月調査）によると、1年前と比べて支出を増やしたものの（複数回答）として「食料品」を挙げる回答は62.7％で

図表1 エンゲル係数の推移



（出所）総務省「家計調査」より作成

図表2 消費者物価指数の推移



（注）それぞれの指数について、2000年が100となるよう、公表されている数値から比例計算を行った。

（出所）総務省「消費者物価指数」より作成

あり（10年前の2016年3月調査では24.5%）、このことから近年の食料品価格の上昇とエンゲル係数の上昇との関係をうかがうことができよう。

なお、食料品価格以外のエンゲル係数上昇の要因としては、①消費支出に占める食料費の割合が大きい高齢者世帯の増加、②人々の嗜好や食生活の変化を背景とした調理食品（惣菜等）や外食の利用の増加などの要因も挙げられている。

（可処分所得、平均消費性向からうかがえる生活の状況）

エンゲル係数は、前述のように、生活の余裕や豊かさを示す指標ともされているが、エンゲル係数が上昇している我が国では、人々の生活に余裕がなくなり、暮らしが貧しくなっていると言えるのだろうか。

図表3は、総務省「家計調査」から、勤労者世帯について、可処分所得（収入から税金や社会保険料を差し引いた額）、平均消費性向（可処分所得に対する消費支出の割合）の推移を示したものである。これを見ると、2010年代半ば以降、賃金上昇を背景として可処分所得が増加しながら、平均消費性向は低下していることが分かる。つまり、可処分所得の増加による購買力の向上が、現在の消費につながっていないということである。そして、可処分所得が、例えば子供の教育費や自らの老後の生活費、あるいは更なる物価上昇への備え等のための貯蓄や投資などに向かうことにより、結果として平均消費性向が低下したと捉えることができよう。このように、賃金上昇により可処分所得が増加しても、先行きのことを考えて出費を抑えて節約せざるを得ない状況にあるとすれば、生活に余裕が出た、あるいは暮らしが豊かになったとは、なかなか言いがたいであろう。

なお、内閣府「国民生活に関する世論調査」（2025年8月調査）によると、将来に備えるか毎日の生活を充実させて楽しむかとの質問に対し、「貯蓄や投資など将来に備える」との回答は43.9%となっている（10年前の2015年6月調査では34.3%）。

（おわりに）

以上のように、近年におけるエンゲル係数上昇の背景としては、将来的な出費を考慮して現在の不要不急の支出（選択的支出）を抑えようとする動きがある中で、基礎的支出であり節約するにも限度がある食料品への支出の割合が上昇した、という見方が1つできるのではなかろうか。スーパーマーケット等での日常的な買物の際、手に取った商品に付けられた価格を見て思わずため息をつくという人は、筆者も含めてであるが、少なくなさそうに思われる。

（調査情報担当室 前田泰伸 内線 75044）

図表3 可処分所得、平均消費性向の推移

